

シェイクスピア英語教育擁護論

清水 英之

序文

「コミュニケーション手段としての英語」を大学で教えることが必須である。新設の大学はもちろん国際社会に目を向けた大学改革は国家的プロジェクトと言わざるを得ない現状であり¹、また、我が国の大学の危機的状況でもある。学習院大学文学部イギリス文学科を卒業して以来、筆者も40年の歳月を英語教育に費やして来た。その間の筆者の英語教育の研究テーマは「英語文学と英語教育の融合」と集約できると思われる。今回の筆者の人生最後の論のテーマは「シェイクスピアと英語教育の融合」である。何年か前に母校に新学部が誕生したとき、「シェイクスピアはやらない」という主旨のことが新学部宣伝パンフレットに書いてあったように記憶している。イギリス文学科時代に4年間、学科所属の「シェイクスピア劇研究会」で原語上演に携わってきた筆者にとって、“Cudgel your brains”と言われたような一言であった。しかし、こうした日本の英語教育の大きな誤解と矛盾を解決できなかったことも事実である。今回の論は、日本の英語教育の誤解と矛盾を指摘するだけでなく、今後の改革に資する提案をすることが目的である。

本論では、先ず初めに日本の英語教育の問題点を再認識する。次に、シェイクスピアの英語から英語現象そのものを理解しようと試みる。次に、シェイクスピア劇の上演および詩の朗読によって日本の英語教育を改革する提案をする。最後に、世界的に人間の精神的成長を促してきたシェイクスピア文学を研究する意義を示唆しようと試みる。

I 現在の日本で求められている英語教育の改善すべき問題点

嘗ての大学には文学部英文科および英米文学科が当たり前存在していた。現在ではその名称は、「文学」の代わりに「文化」が使用されるようになった。一例を挙げれば、筆者が在籍していた学習院大学文学部イギリス文学科は学習院大学文学部英語英米文化

¹ 一例として東京大学で実施された科研費による「21世紀の大学における教養英語教育の可能性の研究」(2002-2005)が挙げられる。

学科と名称が変更された。この変更を余儀なくされた背景には、英語をコミュニケーションの手段として使えるようにならない英語教育に対する産業界の不満がある。しかし、このような英語教育への不満は未だに解消されていない。この現状は、英語留学を教育プログラムに加えても、なんら改善にはならないだろう。なぜなら、我が国の英語教育にはどの段階においても英語の発音を学べる時間と場所が提供されていないからである。この英語発音教育は本来中学校の義務教育レベルで実施されてしかるべきであるが、中学生は英語の発音記号も読めないし、英語の発音はめちゃくちゃで聞くに耐えない。だが、改善は至極簡単と言ってよい。中学校で英語発音教育を実践すべきなのである。以下で、英語教育の第一歩として英語発音教育をどのように行うかを提案してみたい。

1. 発音記号を読めない学生たち

学習院女子大学で筆者がこれまで担当してきた「英語演習」という科目では、英語の発音記号を自信を持って発音できるよう指導することが授業の目的であった。受講生の意見に「中学校でこれを教えて欲しかった」という感想が述べられることが多々あった。今、たまたま、高校一年生に英語を教えているが、中学では発音記号は習わなかったと教えてくれた。では、どのように英語の発音をしているのかと聞いてみると、先生の発音をまねしたり、録音教材で耳で覚えるとのことだった。発音を耳で聴いて「まねる」のが一般に流布している発音指導だと筆者も理解しているが、いったい誰の英語の発音をまねているのだろうかかと危惧するばかりである。英語には民族によって様々な発音の違いがあることが現実なのにと、遣る瀬ない気持ちに駆られる。英語の発音ができなければ英語でコミュニケーションなど成立する訳がない。だから、中学校の英語教育は義務教育でありながら日本社会の期待に応えられない。その状況を今も昔も面々と継続している現状はもう終わりにしなければならない。

2. カタカナ発音の現状

英語の母音や子音の発音方法を学習していない学生や生徒は、若い頃の筆者と同じように英語をカタカナ的に発音している。筆者の「英語演習」では、このカタカナ発音を矯正することが大学の英語授業の目的であり続けた。そして、英語発音に関する知識と訓練によって英語本来の発音（ネイティブの発音という曖昧な言い方ではなく）が出来るようになると、関心のある学生たちは少なからず感動し英語学習への動機を高めてくれた。さらに、英語のリズムやイントネーションの不思議さに興味を抱き、語彙が成立する歴史やイギリスという国家の歴史と民族文化にも好奇心をもってくれるようになった。筆者は、現在「イギリス文化論」や「イギリス文学論」を担当しているが、英語の発音に自信を持った学生たちからはより積極的な受講態度や情熱を感じている。ゆえに、もし、中学校の英語教育にカタカナ英語発音を矯正し本来の英語発音が可能になる一歩

プログラムを導入すれば、将来を担う若者たちに英語コミュニケーションによる国際的活躍の土台を築いてあげることができると期待してやまない。

3. 英語発音上達のための英語教育改革

若者たちにネイティブ並の発音を可能にするための努力と試みに関しては、昨今のYouTubeサイトを調査すれば数多くの動画を発見できる。いわゆるネイティブと呼ばれる人たちのみならず、日本人で英語の発音を指導している人たちの多くの努力を知ることができる。このような人たちの努力が我々の義務教育に導入されれば日本の英語教育は劇的に改善されるであろう。では、大学の英語教育に期待されるべき役割は何なのだろうか。

中学校の義務教育で英語本来の発音方法を指導するには、教師が英語の発音の理論と実践方法を習得する必要がある。中学校で英語を指導するには教員免許状が必要であり、大学の教職課程を履修することが前提となる。筆者の経験でも現状の教職課程で具体的に発音記号を指導できる能力の習得は必ずしも要求されていない。英語の発音指導に自信の無い英語教師が少なからず中学の英語教育の現場に立っている。だから、ALT（外国語指導助手）なる外国人教師を教育委員会が派遣する必要に迫られている。しかし、これらの通称ネイティブと呼ばれている教員たちが本来の英語の発音を指導できるかといえば、それは不可能に近い。筆者の同僚であったアメリカ人教師は、英語の発音は「あなた」が教えてと筆者に言っていたのを思い出す。彼女は“wanna”や“ganna”と筆者が発音すると、あなたは英語教師なのだから、“want to”“going to”と発音すべきだと注意した。それはどうしてかという理由も含めて、英語の発音はネイティブに任せるという日本人の無知による誤解は甚だしく、大学で教職課程を担当する教員がそれを指導しなければいけない責任がある。筆者は、自分自身の自責の念から、本学の紀要に「日本人の英語はなぜネイティブに通じないか？」（2011）、「英語はなぜ日本人には難しいのか：日本語と英語の発音上の根本的違い」（2012）、「日本人が英語で考えられない原因：語順の違いと英語音声の特質」（2013）という3本の拙論を発表した。もちろん経験的な仮説の展開に過ぎないが、英語発音の改善策を提案したいという切実な思いに共感していただければ幸いである。是非、読者のご一読をお願いしたい。それらの論で力説している英語発音上の改善点は以下の通りである。

A. 腹式呼吸による発声法²

B. 英語の母音発音に関する口腔内の舌の動きとその位置³

² YouTube動画「Hideyuki Shimizu：英語のリズム、腹式呼吸と腹筋力」をご視聴ください。

³ YouTube動画「Hideyuki Shimizu：日本人による日本人のための英語母音発音方法」をご視聴ください。

- C. 腹筋の収縮によるリズムの習得⁴
- D. 母音を発音する際の英語の子音の機能と日本語発音における声門閉鎖の機能⁵
- E. 下降調のイントネーションと英語の文法的機能⁶

上記の内容を体系的に指導できる授業を実現するために本学の非常勤講師として務め始めて10年間「英語演習」で試行錯誤を重ねて今日に到った。受講した学生たちの体験も踏まえ、日本人でも本来の英語発音の指導は可能であると断言したい。

Ⅱ シェイクスピア英語に観察できる英語現象の理解

大学でシェイクスピアの英語を学んでも英語コミュニケーション力を向上させることはできない。このような見解は大学教員の多くの意見なのだろうか。また、世間一般の常識なのだろうか。非常勤講師控え室でも多くのネイティブ・スピーカーの教員たちと出会う。最近仲良くなったアメリカ人講師は手作りの教材を筆者に見せてくれた。彼女の努力に大いに感謝するのであるが、筆者はシェイクスピアをテキストに使っているとニコニコしながら伝える。その先生は手作りの教材を使って英会話を指導している。筆者にとっては中学生のときにその教材で生徒たちに教えてあげて欲しいと心から願う。日本の中学校で英語コミュニケーション能力（世間で言う英会話能力）を鍛えて、大学ではシェイクスピアを教えても当然という常識を時間が経っても取り戻したいというのが筆者の夢である。筆者は「英語演習」の一コースでシェイクスピアを教材にして英語発音指導をしている。以下に、Ⅰ章で議論した英語発音指導に加え、シェイクスピアを教材にして指導できる英語現象を紹介したい。

1. 語彙に見られる英語現象

英語教員も含めて多くの日本人が無視しているのが英語の語彙の多様性である。英語の主要な語彙には少なくとも三つの民族の言語が混在している。英語はゲルマン語族であることは知られている事実であろう。もっとも学生たちの殆どは知らないことが多い。しかし、英語の語彙の学習を効率的にするためには最低でもゲルマン語族の語彙とラテン語族の語彙を見分けて使い分ける必然性があることを学習者に示唆しなければならない。

シェイクスピアで最も有名であり、世界中で知られている名句は、“To be, or not to

⁴ YouTube動画「Hideyuki Shimizu：英語のリズム、腹式呼吸と腹筋力」をご視聴ください。

⁵ YouTube動画「Hideyuki Shimizu：なぜ、a appleはan appleになるのか？」をご視聴ください。

⁶ YouTube動画「Hideyuki Shimizu：英語には「ピーヒャラ」という抑揚がある」及び「日本語と英語では考える方法が違う」をご視聴ください。

be, that is the question:”である。シェイクスピアの英語は難しい語彙が使用されているのではないかと多くの人々が勘違いをしている。この名句のどこに見たことのないような単語があるだろうか。すべて、中学生なら理解できる簡単な単語で書かれている。しかし、この語句の中に、「短い単語」と「長い単語」が混在しているという現象に誰も気が付かないに違いない。まだ英文科が多く大学の存在していたころ、英語史を履修した方々ならゲルマン語系の単語とラテン語系の単語の区別に思い当たるはずだ。上記のシェイクスピアの台詞でラテン語系の単語は“question”だけである。しかし、日本人の英語学習者は、このゲルマン語系の単音節中心の「短い単語」とラテン語系の二音節以上の「長い単語」を意識して英語を使い分ける必要がある。

英語史の知識があれば、ブリテン島がローマ帝国に支配されている時代はラテン語が支配的言語であったことが分かっているし、ローマが去った後、アングロ=サクソン人がブリテン島の支配者になり、英語の歴史が始まったことを知っている。その時点から英語はゲルマン語族であるという現象が生じた。しかし、8～9世紀にかけてデーン人がブリテン島に渡来し、古ノルド語という北欧の言語をブリテン島にもたらした。デーン人の言語はゲルマン語族なので、先行者のアングロ=サクソン語と融合し「古英語」を成立させた。だが、1066年にフランス語を話すノルマン人に侵略され、やがて古英語は「中英語」へと変化を余儀なくされた。支配者のノルマン人は古フランス語を喋る民族で、その結果、英語の語彙はゲルマン語系の語彙とラテン語系の語彙が混在することとなった。そして、まさに、シェイクスピアの時代にギリシャ語なども取り入れながら現代英語の基礎となる近代英語が成立した。この英語成立の過程が、英語史で学ばれる英語語彙の現象である。

しかし、この知識は、日本における義務教育の英語学習にはそれほど重要ではない。重要なのは「短い単語」と「長い単語」の区別であり、庶民が日常生活で使う語彙はゲルマン語系の「短い単語」であり、読み書きに使われる教養ある語彙はラテン語系の「長い単語」であるという現実的区別である。ゆえに、日本の義務教育で学ぶ語彙は「日常会話」のための単語群であり、高校から学ぶ語彙は「読み書き」に使われる語彙だという区別を教師が意識して指導すべきなのである。中学で学ぶ語彙を駆使して日常の「英会話」を訓練し、高校以降で学ぶ語彙を駆使して「読み書き」を訓練すべきなのである。その結果、大学の英語教育ではシェイクスピアが教えられて然るべきという常識が成立する。

英語コミュニケーション向上のために、しきりに勧められる学習法は、映画で英語を学ぶ方法であろう。ハリウッドの映画を字幕なしに理解できることが英語学習の目標であったりする。筆者もそうすべきだと賛同はするが、しかし、映画の英語は日常会話ばかりだという事実気づくべきだと思われる。映画の英語を理解するためには中学校の英語教育でこそ映画を教材に用いるべきだろうと、英語の語彙の現象から助言したい。

いやしくも日本の大学で外国人に依存し中学校の英会話を教えているという現状の矛盾を問題視してほしい。

2. 語順に見られる英語現象

シェイクスピアの『ソネット集』の中でも「ソネット18番」は世界的に有名な14行詩である。しかし、これを理解するには些か語順が問題となる。ソネット18番の5～8行目を見てみよう。

Sometime too hot the eye of heaven shines,
And often is his gold complexion dimm'd,
And every fair from fair sometime declines,
By chance or nature's changing course untrimm'd:

現代英語の学習者なら上記の4行すべての語順に違和感を覚えるだろう。副詞句及び副詞の“too hot”、“often”、“from fair”、“By chance or nature's changing course”の位置は少なくとも現代英語の語順に従っていない。筆者も含めて、日本人の英語教師なら「本来の語順は」と前置きして学生や生徒たちに「正しい語順」に並べ替える作業をさせるかもしれない。しかし、英語の世界を代表するシェイクスピアが「本来の英語ではない」「正しくない」英語を使っているという発想自体がとんでもない英語の語順に対する「誤解」であると気づける。シェイクスピアの英語は本来の英語であり正しい英語であるはずだ、だから、現在でも彼の戯曲は原文で上演されている。上記の語順をそのままの語順で英語を理解してこそ本来の英語に触れられる。

それでは語順そのものについて少し知見を広げれば、ゲルマン語もラテン語も語順を比較的自由に換えられる言語だという事実気づくことができる。その理由は、ゲルマン語にもラテン語にも名詞に格変化や動詞に活用があり、主語や目的語の位置を変えても、その関係性は認識できるからである。しかし、シェイクスピアの時代に近代英語に発展した英語は、格変化を無くし、活用も簡略化され、文の要素は語順によって決定されるようになった。その語順の重要性が現代英語の「正しい語順」に対する認識を形成したと一般に考えられている。しかし、本来のゲルマン語族としての英語もラテン語族としての英語も語順は変わるという現象をシェイクスピアの「ソネット18番」で知ることができる。

ここで、筆者は大変興味深い現象に気づいた。それは日本語の語順との比較による気づきとあってよい。上記の4行をそのままの語順で日本語に訳してみた。

時には暑すぎるほど天の目は輝き、

しばしば彼の黄金の顔は曇らされ、
 総ての美しきものは美からいつかは衰え、
 偶然や自然の変遷で飾りを取られる。

シェイクスピアの英語の語順は日本語の語順と見事に一致している。筆者に取っては天地がひっくり返るほどの気づきであった。本来の英語は日本語の語順と同化してくる。それをシェイクスピアが気づかせてくれた。シェイクスピアの英語を学ぶべきではない理由がどこにあるのだろうか。このことに気づき、シェイクスピアの英語は難解であるという苦痛を軽くするために、学生たちにはシェイクスピア英語の「日本語帰り」と命名し、英語に親しみを感じてもらおうと試行錯誤を重ねている。英語の「ゲルマン語帰り」という説明の方が英語史の専門家には納得してもらえるだろう。しかし、少なくとも、英語には正しい語順があると教え込まれる英語教育の若干の「語順に対する誤解」を修正し、本来の英語の語順に関する現象を理解する切掛けになると主張したい。

3. 発音上の英語現象

シェイクスピアの劇中歌、いわゆる、シェイクスピア・ソングに触れたことのある日本人は演劇関係者の他にはいないだろう。英語の本場であるイギリスやアメリカではシェイクスピア・ソングの人気は高い。そんな傾向にも筆者は日本の英語教育に違和感を覚えざるをえない。それでいて、中学校で習う英語でさえカタカナ的発音をする学生たちの英語コミュニケーション能力を高めようと大学は悪戦苦闘している。

“Who is Silvia?”という歌をシューベルトが作曲している。シェイクスピアの劇中歌は、クラシックの世界のみならず多くの作曲家によって曲を付けられ歌われている。日本でシェイクスピア・ソングを歌っている歌手は皆無に近く、筆者は波多野陸美さんしか知らない。そんな状況のシェイクスピア・ソングであるが、“Blow, blow, thou, winter wind,” (*As You Like It*, II, vii) を録音で聴いていると、「おや？」と思うことが起こる。

Blow, blow, thou winter wind,
 Thou art not so unkind

上記の歌詞で一行目の“wind”の発音が[waind]と発音されることがある。その理由は、二行目の“unkind”と韻を合わせるためと理解はできる。そして、大学の授業ではそう説明を受けるであろう。しかし、なぜ[i]を[ai]と発音してもよいのかと疑問を抱くと、英語発音の迷宮に入り込んでしまう。もちろん、英語史を学んできた先生方は解説できるのであるが、英語発音の歴史的变化を知る好奇心を学生たちに抱かせる好機になる。シェイクスピアの近代英語の発音は大母音推移という大変革を経て現在の発音になった。一

例は、“name”が馴染み深いと思われる。筆者が学習院大学のイギリス文学科に所属していたころ、藤原博先生に英語史を教えていただいた。先生曰く、英語の“name”と日本語の「なまえ」は無関係ではなく、英語の“name”は中英語期には「ナーメ」と発音されていた、というのである。つまり英語の発音はローマ字式の読み方であった。ところが、現在までその明らかな原因に定説はないが、[ei]に変化したという現象が起こった。この大母音推移の過程を経て、“unkind”の発音は元々[i]であったが、[ai]に変化したというのである。ゆえに、その変化に合わせて“wind”も[ai]と発音され、見事、韻を踏むことができるという訳である。このような英語母音の発音の歴史的变化を知る機会をシェイクスピアは提供してくれる。この大母音推移を高校で教えても知的に面白いと筆者には思われる。

Ⅲ シェイクスピア劇を用いる英語教育

シェイクスピア劇は台詞の連続である。台詞は、実は、日常会話である。もちろん近代英語であるが、会話のセンスは身につけられる。高校の英語劇で現代英語版のシェイクスピア劇が演じられるのも英語コミュニケーション能力を培うためであろう。また、劇は、読み書きではなく会話であるので、英語の発音が重視される。英語として通じる発音を訓練することができる。以下に具体例を挙げてみたい。

1. *Hamlet*

『ハムレット』を上演すれば、一幕一場を削除する訳にはいかない。劇は二人の歩哨の会話から始まる。

Barnardo. Who's there?

Francisco. Nay, answer me. Stand and unfold yourself.

Barnardo. Long live the king!

Francisco. Barnardo?

Barnardo. He.

Francisco. You come most carefully upon your hour.

Barnardo. 'Tis now struck twelve, get thee to bed, Francisco.

Francisco. For this relief much thanks, 'tis bitter cold,

And I am sick at heart.

Barnardo. Have you had quiet guard?

Francisco. Not a mouse stirring.

Barnardo. Well, good night.

上記の台詞は会話であるので単語はすべて中学程度および高校程度のレベルである。英語史的にいえば、“hour”“relief”“quiet”“guard”以外はゲルマン語系の単語ばかりであり、短い単語の連続である。この会話文を訳読するのではなく、英会話として発音することが日本の英語教育に求められる。指導すべきは、「アクセントのある母音の正しい発音」、「弱母音の発音」、「リズム」、「下降調のイントネーション」であろう。

ここで、筆者からの重要な提案は、「日本語に訳さず、意味を理解する」訓練をするという指導である。この狙いは、ラテン語系の比較的長い単語をゲルマン語系の単音節中心の短い単語で言い換えて意味を理解する習慣を培うことである。また、学習者にとって初出の単語を既に知っている単語で言い換えて意味を理解する訓練でもある。この学習によって英語を英語で理解する能力を培うことができる。この学習によって一般的に言われている英語脳を構築することが可能だと思われる。一例を挙げれば、“relief”を“ease”や“comfort”という既知の単語でその意味を示唆したり、加えて“taking turns”や“changing guards”と説明すれば意味がより理解できるのではないだろうか。この学習時に、*Oxford Advanced Learner's Dictionary*や*Longman Dictionary of Contemporary English*などの英英辞典を引くことを学習者に推奨できる。シェイクスピアの英語だからOEDを引かなければと懸念する必要はあまりない。なぜなら台詞は会話だからである。英語は会話ではゲルマン語系の単語を多用する。

2. Romeo and Juliet

恋愛の台詞を学ぶなら『ロミオとジュリエット』を避けて通れない。次の二幕二場の台詞は英米人なら誰でも知っている。

Juliet. O Romeo, Romeo! Wherefore art thou Romeo?

Deny thy father and refuse thy name:

Or, if thou wilt not, be but sworn my love,

And I'll no longer be a Capulet.

(*Romeo.* Shall I hear more, or shall I speak at this?)

Juliet. 'Tis but thy name that is my enemy.

Thou art thyself, though not a Montague.

O be some other name! What's Montague?

It is nor hand, nor foot, nor arm, nor face,

Nor any part belonging to a man.

What's in a name? That which we call a rose

By any other name would smell as sweet.

So Romeo would, were he not Romeo called,

Retain that dear perfection which he owes,
Without that title.

上記の台詞は独白というシェイクスピアが初めて劇に取り入れた役者の独り言である。独り言は、普段自分が日常的に使う言葉で語られる。舞台がイタリアであるにも拘らず、ジュリエットの言葉はゲルマン語が多い。中学で学ぶ語彙もふんだんに使われている。さて、ここで筆者が指摘したいのは、文法的事項が学べるということである。語彙に関しては“Thou art”や“thy”という古英語由来の人称代名詞と動詞の活用が学べる。“Thou”など現代では使わないと教師が強調し過ぎると、“Thou shalt not kill.”などという英文が出てきてしまうと戸惑うことだろう。さて、文法事項だが、以下の様な英語文法の現象を学習者たちに紹介できる。

「if」の条件節の中の“will”の使い方、「be ... And」の命令形と“and”の用法、「Shall I」の用法、「It ... that」の強調構文、「though not a Montague」における省略、もしくは分詞構文、「Nor」という接続詞の使い方、「belonging」という現在分詞の形容詞的用法、「That which」の関係代名詞の使用法、「By any other name」という副詞句の語順、「would smell」の仮定法、「were he not Romeo called」における“if”の省略、「Without that title」という副詞句が仮定法の条件になっていること」。

以上、シェイクスピアの英語で必要な文法的事項を学べるが、これは日本の英語教育では高校までに学ぶべき英語の文法事項である。『ロミオとジュリエット』で何と豊かな文法的英語現象を学べることだろうか。

3. Sonnet XVIII

シェイクスピアの戯曲ではなく詩では何が学べるだろうか。世界中で有名な「ソネット18番」を取り上げてみよう。初めの四行だけを引用する。

Shall I compare thee to a summer's day?
Thou art more lovely and more temperate:
Rough winds do shake the darling buds of May,
And summer's lease hath all too short a date:

上記の四行からは“compare ... to ...”と“compare ... with ...”の違いを指摘することもできるが、“a summer's day”に思いを馳せることもできる。例えば、“summer”に何で“s”を付加して所有格にできるのだろうかという疑問を抱ける。可能な答えは、“summer”がゲルマン語だからという理由も考えられるであろうし、“summer”を人格化しているからと考えてもよいだろう。このように言葉の意味に思いを馳せることにより意味をイ

メージ化して理解する学習法を指摘できると思われる。“A summer’s day”とはどのような一日が想像されるだろうか。夏の暑い一日では意味が台無しになるであろうが、日本の夏は暑い。では、イギリスの夏はどのような夏であろうか。ここでイギリスの夏に思いを馳せることになる。ここで教師が解説することも可能であるが、学習者に自分で調べさせたら面白いレポートが帰って来るかもしれない。“Lovely”や“temperate”がどのような日常表現で使われるかを調べても学習者は「何が」“lovely”で、「何が」“temperate”なのかを知ることができるだろう。“Rough winds”の“rough”はどんな風の吹き方なのだろうか、また、“wind”になぜ“s”が付いているのだろうか。“Winds”をどの様にイメージしたらよいのだろうか。“The darling buds of May”はどんな花の蕾みなのだろうか。“Summer’s lease”と“short a date”という表現が読み手に何をイメージさせようとしているのか。このような様々な疑問はシェイクスピアが思い浮かべた心象を読者に想起させるであろう。意味を理解する行為は英語を日本語に訳す作業ではない。英語を日本語に訳してしまうと、イギリス人シェイクスピアの意味するところがすべて日本人の読者の自然環境、文化に依存し、自文化中心の理解に止まってしまう。「英語コミュニケーション」という概念で日本人の我々が希求している理想は何であろうか。それは、英語が話される異なる世界の文化を理解するコミュニケーションではなく、英会話ができるという単なる言語能力と技術のように筆者には思える。そうであれば、なおさら英語学習者は英語の発音から学ばねばならない。中学校の義務教育でこそ英会話を徹底的に訓練する必要がある。

Ⅳ イギリス文化を理解するためのシェイクスピア研究

シェイクスピアのテキストをイギリス文化研究に応用することができる。というより、イギリス文化の背景的知識があればシェイクスピアをもっと理解することができる。以下に、シェイクスピア研究の可能性と面白さを学生たちに示唆できればと思っている。

1. シェイクスピア時代の混乱

『ロミオとジュリエット』の最終幕で公爵は言う、

Where be these enemies? Capulet, Montague?

See what a scourge is laid upon your hate,

That heaven finds means to kill your joys with love!

(仇同士の間人は何処にいる？キャピュレット！モンタギュー！)

どうだ、其の方たちの相互の憎しみの上に、どんな天罰が下されたか、

また天は、其の方たちの喜びたるべき子宝が、互いに相愛することによって、

却って互いに滅ぼし合うという、そうした手段をとられることもわかったろう。)

(中野好夫訳)

ロミオとジュリエットの愛を踏みにじったのは敵対する家と家の憎しみなのだ。愚かなキャプレット家とモンタギュー家、それらはイタリアの両家なのであって、決してイギリスの話ではない。しかし、この悲劇を目の前で観ている当時のイギリスの観客に感じられた両家の憎しみと争いは、遠い異国の状況ではない。キャプレットとモンタギューを「カトリック」と「プロテスタント」と置き換えたら、当時の観客たちは胸の詰まる思いを切実に感じたであろう。同じキリスト教を信仰しながら、敵同士であったカトリック勢力とプロテスタント勢力の権力争いに翻弄されたのは、メアリー女王とエリザベス一世という女性であった。彼女たちの悲しみと苦悶を想像してみれば、ジュリエットの悲しみは計り知れないものになるだろう。

ハムレットは一幕五場で父親の亡霊に出会い、復讐を誓った直後に以下のように言う、

The time is out of joint, O cursed spite,

That ever I was born to set it right!

(この世の籠が外れてしまった。なんという因果だ、俺が生まれてきたのは、それを正すためだったのか。)

(河合祥一郎訳)

シェイクスピア時代の観客が“The time”はシェイクスピアと観客が共有している「今」であり、“out of joint”は「混乱」だと感じて不自然ではない。その混乱を“set it right”「正す」ために生まれたのだとハムレットは自分の運命(“cursed spite”)を解釈する。コペルニクスが地動説を唱え、当時のキリスト教信仰の基盤であった天動説が崩壊し始めた。天使が存在している天上界は虚構であり、真実ではないと科学者たちは主張し始めた。それと共に、カトリックの信仰もその根拠たる天上界を失い、キリスト教信仰を一から見直さなければならない危機的状況に陥っていた。そして、プロテスタントが台頭し、クリストファー・マーローを代表とする無神論も出現した。神は、天岩戸に隠れたように姿を消し、ベン・ジョンソンが暴露したように人々は権力欲と物欲と性欲に溺れ、時代は暴力と戦争に明け暮れる現状であった。それでも、キリスト教を信じようとする信仰に厚い人々はイエスの教えである「愛」によって時代の混乱を正さなければならないという使命感を感じるようになった。シェイクスピアがことさら「愛」を主張するのは、このような願いがあったからではなかっただろうか。上記のようなエリザベス朝の時代的混乱を考慮すれば、ハムレットの一句もより理解が広がり深まることだろう。

2. シェイクスピア時代の常識

シェイクスピアの時代は、日本でも戦国時代にあたり、宗教改革の拡大とともにヨーロッパの支配権をめぐり宗教戦争に巻きこまれた時代であった。この時代は、また、天動説の宇宙像が地動説の宇宙像に変革される時代でもあるが、人々の常識は依然として天動説の宇宙像を根拠にしていた。『ベニスの商人』の五幕一場の一節を見てみよう。

How sweet the moonlight sleeps upon this bank!
Here will we sit, and let the sounds of music
Creep in our ears. Soft stillness and the night
Become the touches of sweet harmony.
Sit, Jessica. Look how the floor of heaven
Is thick inlaid with the patens of bright gold:
There's not the smallest orb which thou behold'st

But in his motion like an angel sings,
Still quiring to the young-ey'd cherubins;
Such harmony is in immortal souls,
But whilst this muddy vesture of decay
Doth grossly close it in, we cannot hear it.
(この堤に眠る月の光のなんと美しいことか!
われわれもここに腰をおろし、忍びよる楽の音に
耳を傾けるとしよう。やわらかく夜を包む
この静けさは、妙なる音楽を聞くにふさわしい。
おすわり、ジェシカ。どうだ、この夜空は!
まるで床一面に黄金の小皿を散りばめたようだ。
きみの目に映るどんな小さな星屑も、みんな
天をめぐりながら、天使のように歌を歌っているのだ、
あどけない瞳の天童たちに声を合わせてな。

不滅の魂はつねにそのような音楽を奏でている、
ただ、いずれは塵と朽ちはてる肉体がわれわれを
くるんでいるあいだは、それが聞こえないのだ。)

(小田島雄志訳)

時は夜、場所は庭園、月が照り、満天の星が見えている。室内からは楽士たちが奏でる音楽が聞こえてくる。愛する女性と一時を過ごすには素晴らしい設定だ。英語では「音楽」を“sweet harmony”と言い換えている。「夜空」を“the floor of heaven”、「満天の星」

を“thick inlaid with the patens of bright gold”と表現している。また、語順を整理してみれば“the smallest orb”が主語で“in his motion”「回転しながら」、*“like an angel”*「天使のように」*“sings”*「歌っている」と表現している。尚かつ、“the smallest orb”が“Still quiring to the young-ey’d cherubins”「常に若い目をしたケルビムたちに合わせ合唱している」と描写されている。現代の日本人の我々なら、すべてがシェイクスピアが想像力を駆使して比喩をしたと理解するだろう。しかし、『エリザベス朝の世界像』（筑摩叢書、1992）（E. M. W. Tillyard, *The Elizabethan World Picture*, 1943）によると、シェイクスピアは天動説の世界観を表現していたことが理解できる。それは、エリザベス朝時代に生きていた人々の常識であり、地動説の世界に生きている現代人の常識とは異なっていたことが分かる。地球が宇宙の中心で、地球の周りを回転する初めの天球（“the smallest orb”）は「月」の天球であり、月には「天使（“angels”）」が存在し、次に水星、金星、太陽、火星、木星、土星の順番で各天球を回転し、一番遠い天球は「恒星天」という恒星が張り付いた（“thick inlaid with the patens of bright gold”）天球であった。その恒星天に「ケラビム（“cherubins”）」という天使たちが存在し、各階級の天使たちは異なる音色の歌を歌っていたがその合唱は「調和（“harmony”）」していた。その月より上の天上界の天使たちの歌声は「天球の音楽」（“the music of the spheres”）と呼ばれる永遠の響きであった。ロレンゾーはジェシカにこの天球の音楽の話を教養たっぷりに語っているのだ。これがエリザベス朝の常識であって、現在ではただの迷信、もしくは美しい虚構なのである。このようにシェイクスピアのテキストから今とは違う常識を知ることができる。

3. シェイクスピアと英語聖書

ソネット105番でシェイクスピアは以下のように述べている。

“Fair,” “kind,” and “true” is all my argument,
 “Fair,” “kind,” and “true” varying to other words,
 And in this change is my invention spent,
 （「真・善・美」が私の主題のすべてであり、
 「真・善・美」を別のことばに言いかえる
 その言いかえに私の創意工夫のすべてがある、）
 （小田島雄志訳）

シェイクスピアは、“fair,” “kind,” and “true”こそが彼の願いであり、それしか望まない。その願いを自分の能力を駆使して、喜劇や悲劇の作品として生み出しているのだと言っている。“Fair,” “kind,” and “true”は、ゆえに、シェイクスピアの本心を理解するために

極めて重要な表現なのだ。しかし、訳の一例を見てみると、「真・善・美」と訳されている。これはギリシャ哲学の真、善、美が解釈の参考になっている。高松雄一訳では「美しく、優しく、真実の」と訳され、坪内逍遙訳では「美にして慈にして真なり」と訳されている。言葉の順番通りに訳せば、「美しく」「親切で」「真実だ」という順番になる。三つの言葉は品詞的には、すべて形容詞である。ゆえに“Be fair, kind, and true!”と理解しても意味することは変わらない。この順番をどうしてギリシャ哲学を参考に「真、善、美」という順番に変える必要があるのだろうか。ここに、一つの疑問が筆者の心に浮かんだ。なぜ、シェイクスピアは“fair, kind, and true”の順番にしたのだろうか。この順番でなければならない何か強い根拠があるのではないかと思われた。シェイクスピアの生きていた頃、当時の人々に強い影響を与えた本が出版された。それは『ジュネーブ聖書』(1560)という英語に訳された聖書であった。イエス・キリストの言葉の影響は、例えば、ソネット29番の友情に対する深い思いにイエスの“Greater love has no one than this, than to lay down one's life for his friends.”(「ヨハネ伝、15章13節」)という言葉が想起される。“Fair, kind, and true”の順番に関しても、イエスの言葉を探して見ると、“justice and mercy and faith”(「マタイ伝、23章23節」という言葉があった。この言葉は、『欽定訳聖書』では“judgment, mercy, and faith”となっており、『ジュネーブ聖書』では“iudgement, and mercie, & fidelitie”となっている。このイエスの言葉の順番は、“fair, kind, and true”と一致している。“Judgement”は、聖書の世界では「神の裁き」が元々の意味であるが、現代では“justice”と理解され、OEDの“judgement”の10, a.には“justice, righteousness, equity”という意味が載っている。“Judgement”をゲルマン語系の単語で言い換えれば、“fair”で良いし、“mercy”は“kind”で、“faith”及び“fidelitie”は“true”と言い換えても良いであろう。故に、シェイクスピアが自分の主張のすべては“fair, kind, and true”なのだと言うとき、その背景にイエスの言葉があると理解できるのであり、ギリシャ哲学の「真、善、美」を持ち出す前に、英語聖書の影響があることを指摘しても良いのではないだろうか。

4. シェイクスピアの思想研究

シェイクスピアの思想を理解しようとする試みは、同時にヨーロッパの思想の土台をなすキリスト教理解に繋がる。この点、日本人の理解力は宗教性を許容しない傾向がありシェイクスピアの思想を自文化中心主義的に理解しがちだと思われる。これまでの日本のシェイクスピア学者の諸説もキリスト教には触れずに、近代の哲学的、思想的観点からシェイクスピア文学を論じて来たように思われる。しかし、シェイクスピアを繰り返し読むと、「愛」と「死」が描写されていることが明確に理解できるし、ハムレットの“Readiness is all.”こそ、シェイクスピアがたどり着いた思想なのだ多くの研究者が力説している。ここでは、シェイクスピアが重要視している思想として、あらかじめ「メ

メント・モリ」と「カルペ・ディエム」そして“Readiness is all.”を考察してみたい。

4-1 メメント・モリとカルペ・ディエム

「ソネット18番」を読んでも『ロミオとジュリエット』を読んでも、「愛」と「死」の心象が読者の脳裏に印象深く残ることだろう。美しい夏の一日に喩えられる「君」に対する詩人の愛は死を超越し人類とともに生き続けるのだという主張の中にメント・モリ「死を想え」という思想とカルペ・ディエム「今日を掴め」という思想が含意されている。ジュリエットは五幕三場で最後にこう言い、息を引き取る。

O happy dagger,

This is thy sheath; there rest, and let me die.

ああ 幸せな短剣、

ここがあなたの鞘よ、そこに納まりなさい、私を死なせて。

(清水英之訳)

ジュリエットは自分の胸をロミオの短剣で刺し、死んで行く。この死という結末で、ジュリエットとロミオは永遠の愛を手に入れた。シェイクスピアは見事にメント・モリとカルペ・ディエムを融合させている。このような愛と死の結合は、シェイクスピア文学の中でも最も美しい瞬間なのであろう。

しかし、このメント・モリとカルペ・ディエムという西洋の二大思想が何時頃から登場してきたのだろうかと疑問を抱くと、また別の研究が生じることになる。昨今のネット社会であれば容易に検索し調べることが可能だ。それこそウィキペディアを使えば次の様な情報を得られる。古代ローマでは「メント・モリ」の趣旨は*carpe diem*（今を楽しめ）ということで「食べ、飲め、そして陽気になろう。我々は明日死ぬから」というアドバイスであった。ホラティウスの詩には「*Nunc est bibendum, nunc pede libero pulsanda tellus.*」（今は飲むべきだ、今は気ままに大地を踏み鳴らすべきだ）とある。」一方、カルペ・ディエムをウィキペディアで調べると、「飲みかつ食べよう、明日死ぬのだから」という語句が『イザヤ書』22章13節および『コリント人への第一の手紙』15章32節に登場することが分かる。また、この語句が『コヘレトの言葉』（『伝道の書』）9章にも遡ることが分かる。

4 For to him that is joined to all the living there is hope: for a living dog is better than a dead lion.

5 For the living know that they shall die: but the dead know not any thing, neither have they any more a reward; for the memory of them is forgotten.

6 Also their love, and their hatred, and their envy, is now perished; neither have they any more a portion for ever in any thing that is done under the sun.

7 Go the way, eat thy bread with joy, and drink thy wine with a merry heart; for God now accepteth thy works.

8 Let thy garments be always white; and let thy head lack no ointment.

9 Live joyfully with the wife whom thou lovest all the days of the life of thy vanity, which he hath given thee under the sun, all the days of thy vanity: for that is thy portion in this life, and in thy labor which thou takest under the sun.

『伝道の書』はソロモン（紀元前1011年頃～紀元前931年頃）の教えと伝えられている。栄華を誇ったソロモンの悟りの言葉であれば、一度は考察すべきであろう。中でも“to him that is joined to all the living there is hope”「生ある人々に与る者には希望がある」（筆者訳）、“the living know that they shall die:”「生きている者は自分たちが死ぬべき運命にあることを知っている」（筆者訳）、“eat thy bread with joy, and drink thy wine with a merry heart, for God now accepteth thy works.”「喜んで汝のパンを食べよ、楽しい気持で汝のワインを飲め、なぜなら神が今でこそ汝の仕事を受け入れてくださるからである。」（筆者訳）、“Live joyfully with the wife whom thou lovest all the days of the life of thy vanity,”「汝の空しい人生を通して汝が愛する妻と睦まじく生きよ」（筆者訳）、という言葉を経合すると、メメント・モリとカルペ・ディエムの源泉を感じ取ることができる。

このように、西洋に脈々と流れる中心的思想であるメメント・モリとカルペ・ディエムをシェイクスピア文学を通して知ることができる。

4-2 “Readiness is all”

シェイクスピア自身の思想はどのようなだろうか。多くのシェイクスピア研究者が考察をしてきている。彼自身の思想を考える時に以下の三つの台詞が重要だと思われる。

“The time is out of joint, O cursed spite,

That ever I was born to set it right!”

(*Hamlet*, I. v.)

「時代の籠が外れた、なんと呪われた運命か、

この私が生まれたのはそれを正すためだとは！」

このハムレットの台詞で注目すべきは“The time”である。「時代」とはシェイクスピアが生きている「今」なのである。彼は、カトリックとプロテスタントの宗教戦争の最中

に生きていた。そして、天動説の崩壊によりキリスト教信仰も疑われる時代を生きていた。その象徴はデカルトの懐疑主義と理解され、哲学の時代が到来したと考えられる。シェイクスピアはキリスト教信仰に代わり、信じるべき何かを見出すことができたのだろうか。

Not a whit, we defy augury. There is special providence in the fall of a sparrow. If it be now, 'tis not to come—if it be not to come, it will be now—if it be not now, yet it will come—the readiness is all. Since no man, of aught he leaves, knows what is't to leave betimes, let be.

(*Hamlet*, V. ii.)

ハムレットは言う、「雀一羽落ちるのにも特別な神意があるのだ。」ここで“the fall”を「死」と理解すれば、その後の“If it be now,”以下の“it”は神意としての「死」を意味していると解釈できる。「死が今であれば、後には来ない—後に来ないのであれば、今が死ぬ時—今でないとしても、やがては来るのだ—覚悟が肝心だ。」神の意志である死がいつ来てもよいように心の準備をしておくことだと、シェイクスピアは悟ったのであろうか。まさに、メメント・モリを伝えている。

そのような死すべき運命を意識しながら人々はどのように生きたらよいのだろうか。『リア王』の最後でエドガーが言う。

EDGAR The weight of this sad time we must obey;
Speak that we feel, not what we ought to say.
(*King Lear*, V. iii.)

エドガー：我々はこの悲しい時の重荷を耐えなければならない、
我々の感じることを語ろう、言うべき事ではなく。

(筆者訳)

このエドガーの台詞で筆者が感じることは、これはまさにカウンセリングの自己開示を意味しているということである。この台詞を読んでフロイトは超自我や抑圧に気づいた可能性も考えられるし、フロイトを土台として現代のカウンセリングにおける共感的理解や抑圧された感情の自己開示が発展してきたように思えるのである。本当の気持を相手に率直に伝えるという発想はコミュニケーション研究の基礎を築いたようにも思える。そう考えると、シェイクスピアは歴史的にコミュニケーションに関する重大な示唆をしていたことになる。この台詞とコミュニケーション技術の関連性は今後検討されるべき日本の我々の時代の重要な課題であろう。

結局、シェイクスピアの最も重要な思想は何だったのだろうか。そう疑問に思うと、筆者にはやはりソネット105番が思い浮かんでしまう。

“Kind is my love to-day, to-morrow kind,
Still constant in a wondrous excellence,”

“Fair, kind, and true, is all my argument,
Fair, kind, and true, varying to other words,
And in this change is my invention spent,
Three themes in one, which wondrous scope affords.”
(Sonnet CV)

第3章で議論したが、“fair”を“justice”と解釈すれば、“fair, kind, and true”は「公平で、親切で、偽りのないこと」と理解できる。シェイクスピアはイエスの言葉に人生で最も重要な哲学を見出したのではないだろうか。哲学は我々の生き方を決定する「言葉」であり、現代ならば「認知」と呼ばれている。シェイクスピアの生き方を決定した認知はイエスの言葉であったのではないだろうか、そして、その言葉に、崩壊する時代の精神的混乱を乗り越える信仰を再発見できたのではないかと筆者には思えるのである。

とにかく、上記のように現代人の我々はシェイクスピアの思想を考察することで自分自身の生き方を発見する切掛けを得ることができる。

結論

昨今の日本の大学では「コミュニケーション手段としての英語」を教えることが必須の課題となっている。日本人は英語でコミュニケーションができないと一般的に言われている。この見解は、実は、日本の英語教育の完全な失敗を意味しており、日本の国際貿易にとって弊害となっている。産業界からは当然我が国の英語教育に対する改革が切望されているが、中学校から大学まで英語教育を変革できる妙案はなく、また、改革の指導者も台頭していない。このような現状の重大な原因は、実は、日本人の英語教師が英語の発音を指導しないところにある。

筆者は、学習院大学文学部イギリス文学科時代に4年間、学科所属の「シェイクスピア劇研究会」で原語上演に携わってきた。この経験は、英語教育における発音指導の研究開発へと筆者を導いて来た。また、イギリスが生んだ世界の文豪の文学世界を探究する道へと筆者を導いた。本論では、第1章で日本の英語教育の問題点を再認識し、第2章でシェイクスピアの英語から英語現象そのものを理解しようと試みた。第3章ではシェ

イクスピア劇の上演および詩の朗読によって日本の英語教育を改革する提案をした。第4章では世界的に人間の精神的成長を促してきたシェイクスピア文学を研究する意義を示唆しようと試みた。

中学や高校でもシェイクスピアで英語教育はできる。ましてや、大学でシェイクスピアが蔑ろにされている現状を許容してはいけない。なされなければいけない英語教育改革は中学校での発音指導である。中学校の生徒たちが正しい英語発音を習得し、英語でのコミュニケーションを楽しんでいる姿を想像し、このシェイクスピア英語教育擁護論のペンを置きたいと思う。

(本学非常勤講師)